

<報告>

1. ネームボードの取り付け

11月8日にカシューオーナーの皆様の名前を書いたボードを取り付けました。フルネームを日本語の漢字で書き、ファーストネームをシンハラ文字で書いたボードです。漢字は自筆です。へたな筆跡ですが、まあ記念だからいいかと勇気を奮いました。インドラナンダさんの弟子である青年たちの協力で141枚を取り付けてきました。

2. 理事会の開催

11月10日に帰国し、28日に理事会を開催しました。スバ・ランカ農園の開設に関して疑問があるとのことでしたので、スバ・ランカ農園Q&Aを作り、それを基に議論しました。スバ・ランカ農園の開設について会員の皆様により一層のご理解を得たいと考えておりますので、Q&Aを掲載します。お読みいただきご意見をください。

スバ・ランカ農園に関するQ&A (2009年11月22日 文責：大岩碩)

**Q** 寄付金を募る文書には、母親の老後のためにカシューナッツの森を買って欲しいと言っている人がいるので何とかしてあげたいという趣旨のことが書いてあったが、別の森を買うことになった今、この同情を誘う文は何であったのか。

**A** この点を指摘されると、なんと云えばいいのかわかりません。経過を詳しく説明する中で理解を得たい。

森の買取の話が出てきたのは、2009年3月の頃であった。カシューナッツの植林ができる農地を探してくれるように、私の20年来の友人であり、スバ・ランカ協会のスリランカ事務所の代表であるインドラナンダさんに依頼していた。探す過程で、母親のためにカシューナッツの森を買って欲しいという人物が居るので、植林するために農地を借りるよりは、農地自体を買い取ってはどうかという話になった。買い取った農園で収穫できるカシューナッツを売り、そうして得た収益が協会の活動資金になるのではないかと考え、私が直接その人物に会ってから話しを進めることにした。

私がスリランカに赴いたのは5月13日であったが、その1週間後に内戦終了という思いもかけないことが起きた。買って欲しいといった人物に会ったのが5月30日であった。これからこちらも寄付金をお願いするので、お母さんのために森を売りたいという気持ちと、それを50万ルピーで売る意思があることを確認した。

そこで、理事に寄付金依頼文案を送付して、検討を依頼し、理事から意見をもらい、それを踏まえて作成した修正文を理事全員に送り、賛否を問うた。反対はなく、6月10日付けで、Eメールのある会員約70名に、寄付依頼文を送信した。その結果、6月30日の期限までに122名の方と第一物産株式会社から寄付金をいただいた(現在は、140名と1社)。7月4日に、寄付金をスリランカに持参し、Masaru Oiwa名義の銀行口座に入れた。こちらは支払いの準備が整ったため、森の所有権を法的に確認し、買い取りの日程を決めるように、インドラナンダさんに依頼したが、何の連絡もなく時がすぎ、7月末になってしまった。ど

うもおかしいと思いつつ、スリランカだから法的確認が遅くなるのかとも思っていたが、結果は最悪であった。その森は自分だけの所有ではなく、兄弟姉妹の共有のため全員の同意が取れず、すぐには売れないという話になっていた。これを知ったのは8月3日であった。兄弟姉妹間でお母さんの老後のためという話してまともにならなかったのか、共同所有などとは何も言わずに、今になって何という言い分なのかと憤りを覚えたが、どうにもならなかった。この点はインドラナンダさんも同様で、どう説明しようかと責任を感じ眠れなかったという。どうも、内戦の終了で、この森の近辺の土地が大きく値上がりしたために、態度を変えたのではないかというのが周りの解釈であった。

このように、母親の老後のためという文は、強調でもなんでもなく、相手の言うことを信じて書いたままで、情に訴えて寄付金を多くもらおうと創作したわけではない。しかし、結果として、私の判断が甘かった点はお詫びするしかない。

**Q** 寄付金の依頼文に書いた森が買えないとなった時点で、どうして理事会に諮るなり、寄付者全員に伝えて、どうすべきか意向を聞くべきではなかったのか。

**A** その必要性は全く感じていなかった。森の買取の趣旨は、友人の母親の老後のためということよりも、協会の設立時からの課題であった「協会の活動資金について、会費や会員の寄付金だけに頼るのではなく、まとまった金額を継続的に確保できる手立てを考えたい。」という点にあると考えていたからである。協会設立当初は「産業起こし」を実現し、その収益の一部を活動資金とすることを目標に頑張ってきたが、諸般の事情から頓挫しまった。そこで、これに代わるものとして、対日輸出ではなく、スリランカ国内において、その実を高く売ることのできるカシューナッツ栽培に注目し、その植林が可能な耕地を探していたところ、上記のような買い取りという事態になったのである。皆さんが寄付金を下さったのは、所有者への同情もあったかもしれないが、それよりむしろ、この協会の基本的な戦略に賛同して下さったからであると判断していたため、何とか継続して努力し、他の買い取り可能な物件すなわちカシューの森を探さなくてはならないと考えた。そうでなければ、森を買い取るといって寄付金を集めたことが詐欺行為になってしまうとさえ思った。したがって、皆さんに、あるいは理事会に図る必要性など全く考えなかった。

**Q** 収益を上げるというが、本当に可能か。

**A** 収益を上げるには、農園に常駐して、カシューナッツを含む作物栽培を専業とする「管理者」が居なければ無理である。幸いにも、インドラナンダさんの俗人弟子に当たるクマール夫妻が管理者になってくれることになり、この問題は解決した。彼は長く海外に出稼ぎに出ていたが、そこで稼いだ金で、スバ・ランカ農園の隣の隣の農地を買い取り、出稼ぎを止めてスリランカに留まり、自分の農園とスバ・ランカ農園において作物栽培を行う専業農家となって生計を立てる決心をした。クマールは28歳である。彼には、スバ・ランカ農園にある家と店を無償で貸し、農園で栽培したカシューナッツ以外の作物に関しては収益を折半することで話がついている。現在、すいかとかぼちゃの植え付けを終わったとのことである。すいかとかぼちゃはいずれも2ヶ月で収穫ができるそうなので、1月にはスバ・ランカ農園最初の収益が得られるであろう。カシューナッツは3~5月に収穫し、高値となる9~10月くらいに売る。近くに、知り合いの加工工場があり、その工場主と交渉できている。2~3年頑張れば、年間でそれなりの純益は得られると予想している。

Q 3600 坪の農園で、安定した収益は上げられるのか。

A 3600 坪では収益を上げるの十分な広さではないと考える。安定した収益を確保するためには、さらに同じくらいの広さの農園が必要である。4.5 アッカラ (5400 坪) のカシューの森が 90 万ルピー (約 75 万円) で売りに出ている。これを買取ることができれば、広い、古い大きなカシューがかなりあるので収益は安定すると考えられる。どのような形でお金を集められるかを模索中である。

Q 買取った農園は、協会の将来との関連からどうなると考えているのか。

A 後継が不可能となり、協会が存続しないときは、スリランカのインドラナンダさんに任せる。インドラナンダさんを会長とするスバ・ランカ基金 (仮称) を設立し、この基金に農園の収益を託し、ボランティア活動資金とする。スリランカ人のために、スリランカ人自身の手による、継続的なボランティア活動を実現する。農園買取によって、最終的には、ボランティア活動の現地化、ボランティア組織の創設と自立を促すことになる。後継が可能であれば、定款の変更をも含めて、後継の方々に任せる。

### 3. 夏服の寄付

多くの方から夏服をいただきました。我が家の玄関にいっぱい積み上げられており、驚きつつ合掌しました。お名前は書きませんが、本当にありがとうございました。

#### <連絡>

#### 1. 理事会と総会のお知らせ

理事会 2010年1月16日 (土) 午後 5時 ~ 7時ころまで  
名古屋市女性会館 小会議室

総会 2010年1月31日 (日) 午後 1時30分~4時30分まで  
名古屋市女性会館 大会議室

- 議題
1. 2009年度事業報告
  2. 2009年度収支報告
  3. 2010年度事業計画
  4. その他

理事会での検討の結果によって議題は変わるかもしれません。ご了承ください。

今回はお昼間ですので、総会にぜひふるってご参集ください。

以上です。

皆様

この一年、本当にお世話になりました。いろいろなことがありましたが、皆様のご協力で何とか無事に2010年を迎えられそうです。心から感謝し、お礼を申し上げます。ありがとうございました。良いお年をお迎えください。

理事会役員一同